**説教20231001フィリピ1：21-36マタイ20：1-16「会うにしても離れているにしても」**

**今日の二つの聖書箇所に共通するテーマは働きであります。働きと言う言葉は元のギリシャ語ではエルゴンと申しまして、フィリピの信徒への手紙の１章22節に出て参ります。その箇所を読んでみます。**

**けれども、肉において生き続ければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。**

**この様にパウロは、天に召されるまで、この地上で、この肉体をまとって生きている間の、実り多い働きについて思いを巡らせています。パウロが言いますこの働きということは、もちろんキリストの福音を告げ知らせる伝道の業のことでありますが、それだけではありません。私たちは各々の信仰を深め、そして日々、キリストの福音にふさわしい生活を続けていること自体が、実り多い働きとなっています。別に、日々伝道するぞ！と言って力んでいなくても、常にイエス様と共に歩む生活をし、み旨に適った行いを、静かに行い続ける人は、それだけで、実り多い働きを続けているといってよいでしょう。**

**又、働きと言うのは、同時に戦いでもあります。クリスチャンならばご経験のことと思いますが、クリスチャンとしてこの地上で暮らしていますと、必ず、反対者たちに出会うことになります。それは当然のことでありまして、イエス様を第一として生きているクリスチャンは、たとえば自分を第一にして生きている人から理解されず、反感をもたれ、時には迫害を受けたりもします。そんな苦しみの時に喜びをもたらしてくれるものが、聖霊であり、私たちは一つの聖霊を分け与えられて、心を合わせて福音の信仰の為に共に戦うことが出来るのです。**

**聖霊を頂いて、日々クリスチャンとして生きておりますと、人との関係性が変わって参ります。信仰を共にし一つの聖霊を頂いている者同士は、隣人愛で結ばれて、実り多い働きを共に行っていく事が出来るでしょう。また、「会うにしても離れているにしても」、同じ天の国に向かって歩み続ける同労者として心が通い合って、その間柄が深まって参ります。或る二人が、離れている時間を大切にして、益々信仰を深めるならば、再び会った時の喜びもいや増すことでありましょう。**

**そして、「会うにしても離れているにしても」ということは究極的には、クリスチャンたちが天の国で再会するということまで、物語っています。**

**クリスチャンの命は、この世の死で終わるのではありません。クリスチャンはこの世の命を終える時、イエス様に引き寄せられて、最終的な目的地である天の国への歩みを始めます。今は召天された召天者たちと、未だ地上にいます私たちは、離れ離れになりますが、それはのことであり、時が来れば、天の国が降りてきて、私たちはその天の国にて再会をすることになるのです。**

**それでは、その天の国での私たちの生活はどういうものなのでしょうか。このことを良く黙想しておくことが大切かと思います。天の国では、もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない、とヨハネ黙示録には記されています。これだけを読めば、天の国と言うのは、いわば仏教でいうところの極楽浄土で、人間が心地よい住まいで楽しみ過ごしていくところとイメージ出来るかも知れません。**

**しかし、ヨハネ黙示録には天の国の様子が次の様にも記されています。ヨハネ黙示録２２章2節から、新約聖書後方479ページになります。**

**川は、都の大通りの中央を流れ、その両岸には命の木があって、年に十二回実を結び、毎月実をみのらせる。そして、その木の葉は諸国の民の病を治す。**

**もはや、呪われるものは何一つない。神と小羊の玉座が都にあって、神の僕たちは神を礼拝し、御顔を仰ぎ見る。彼らの額には、神の名が記されている。**

**もはや、夜はなく、ともし火の光も太陽の光も要らない。神である主が僕たちを照らし、彼らは世々限りなく統治するからである。**

**彼らは世々限りなく統治するからである、の彼らは神の僕、即ちクリスチャンたちを指しています。すなわち天の国に入れられた、クリスチャンたちはますます、主イエスと一つとされて、共に世々限りなく統治する者となるということです。**

**つまり、私たちは天の国に入れられたら、ぼんやりと楽しむ者になるのではなくて、益々主イエスと共に働く者にされるということであります。但し、この天の国での働きというものが、少しのやらされている感もなく、全く喜びに満ちた働きであることは言うもでもないでしょう。ですからこの働きと言うのは、礼拝する私たちが神の御前に安息をするということと等しくなるのです。**

**今日語られています、私たちの働きが、最後まで終わることなく続けられるということは大事なことです。フィリピの信徒への手紙/ 01章 21節に**

**わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。**

**という有名なパウロの言葉がありますが、この言葉は私たちにとって時に理解に苦しむ言葉となるでしょう。特に、死ぬことがなぜ利益なのか、ということであります。このことを今日の説教に照らして説明すれば、私たちは死んだ後も、決して働くことを止めるのではなく、反対に、主イエスと結ばれて、益々働く者とされるということです。ですからパウロは、この世を去って、益々素晴らしい働きが出来ることを待ち望みながら、「死ぬことは利益なのです」と言ったのでありましょう。**

**さて信仰生活を貫く柱としての働き（エルゴン）について語って参りましたが、このエルゴンの意味を辞書で調べてみますと、次のような多様な意味がありました。実行、行い、なすべき事、奉仕、仕事、ビジネス。**

**教会では、教会内での諸々の働きのことを奉仕と言いますけれども、これもエルゴンの一種であります。又、この世の中での諸々の仕事、ビジネスもエルゴンの一種なのです。そういう意味で、教会の仕事と、世の中の仕事には共通点があり、全く別のことではないのです。**

**16世紀以降のプロテスタント教会、この別府不老町教会もそうですが、これらの教会では、この世でそれぞれ人に与えられている職業や仕事を、神さまからの召しとして重んじています。召しと言うのは英語でいえばcallingでありますが、私たちはこの世にあって、神からの召しを受けて、今のそれぞれの仕事、働きに従事しているのです。**

**今日の、マタイ福音書の箇所は、天の国での私たちの働きのありさまが、この地上での働きに喩えられて描かれているので、その二つの働き方の違いを較べて考えると興味深いです。**

**先々週の私の説教では、天の国において、神に憐れまれて、借金を帳消しにされた家来の姿が語られました。そして今日のマタイ福音書では、天の国において、ブドウ園で賃金労働をする人たちの姿が語られます。ここで私たちは、イエス様のたとえ話に、わざと天の国においては相応しくない、お金ですとか賃金労働などをわざとたとえとして登場させていることに留意したいと思います。天の国では金や銀は満ちあふれていますから、それを楽しむことはしても、それを交換の手段として利用することは最早ないのです。**

**天の国においては、最早、お金は役には立たないということであります。**

**では、イエス様は、今日のマタイ福音書の箇所で、何を私たちに教えようとされているのでしょうか。それは、お金の魅力に引き寄せられて、お金を偶像崇拝してしまう私たちの罪を戒めることであります。**

**このぶどう園の主人と言うのは、主なる神を喩えています。主人は、何もしないで広場に立っている人々を次々とぶどう園での働きへと召し続けます。この主人の召し、callingは、夜明けから始まって、９時、12時、5時と続けられます。**

**イエスさまも、このように私たちを今日も明日も新しい召しへと招かれます。**

**私たちはクリスチャンとなり、生きていても又死んだ後も、イエス様と共に歩むようになるならば、この働きへの召しを最後まで絶えることなく、イエス様から受けることになるでしょう。私たちはイエス様と共に歩み続ける限り、失業をする心配がありません。**

**このブドウ園の主人は、労働者を働きへと召し続けますが、その姿は将に、私たち人間を最後まで見放さないで、相応しい働きへと召し続けて下さる主なる神のお姿を描いているでしょう。私たちは主イエスを礼拝し続けるならば、失業することがないのです。**

**反対に、私たちはお金を偶像崇拝し始めますと、失業してしまうでしょう。**

**最近の社会の嘆かわしい風潮として、子どもを生み育てることに極度に消極的であるということがあります。聖書の冒頭で、「産めよ、増えよ」と主なる神は言われて、私たち人間がこの地上で生まれ増えることを祝福されました。主なる神は、人間が生まれ増える為の働きを祝福され、その働きの為に人々を召しておられるのです。ところが最近の社会では、子どもが生まれることが先ず金銭的な重荷として認識されるようになってしまって、子どもを産み育てる喜びと言うのはどこかに行ってしまっている様です。**

**マタイ福音書に戻ります。最初に雇われた人たちは、主人に不平を、次の様に言いました。**

**『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。』**

**この不平を言った労働者は、目の前に差し出された1デナリオンに満足できませんでした。彼はお金を偶像崇拝し始めたのでした。**

**主人は答えます。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』**

**天の国は憐みに満ちています。そこではその都度、主なる神から恵みが豊かに与えられることでしょう。天の国を目指して歩んでいる私たちは、今この地上においても、1デナリオンに満足できないと不満を言う必要はないのです。**

**天の国で、金や銀よりもはるかに、だいじなものは、言葉です。不満を言った労働者の言葉は、『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。』でした。この言葉は、人間的には同情出来るにしても、罪が含まれていることに変わりはありません。この労働者は、今日も明日もあなたも召し続けたいという主人の御心が分っていないのです。**

**しかし、主人は、罪あるこの労働者を突き放すことなく、優しく戒めとさとしの言葉を与えられました。**

**私たちは、未だこの地上にあって、日々働いている者たちであります。そして天の国でと同じように、この地上にあっても、主イエスの御言葉は、お金よりもはるかに価値があります。**

**『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と主イエスは言われました。私たちは、ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送り、お金を偶像崇拝することなく、日々イエス様の御言葉をいただいて、新しい働きへと召されて行かれますよう、祈り願います。**

**祈り**

**父なる神よ、地上における私たち人間の働きを導き、守り祝して下さい。私たちをバベルの塔を建て続ける空しさから救い出して下さい。益々、御心を行うものたちとし、恵みと慈しみに追われる生活を送らせて下さい。**

**主よ、どうか罪ある私たちの行いをお許しください。私たちが益々あなたの者となり、罪打ち砕かれて、天の国に向かう者とならしめてください。今日、あなたの聖霊を受けて、清くされ、この世のあらゆる誘惑に打ち克つ心と体を備えさせてください。**

**御子イエスによって、世界が一つとされていき、主の平和がこの地上にも満ち溢れますように。**